



パブリックアウトリーチ

まとめにかえて

縣 秀彦 (国立天文台)

天文情報処理研究会での発表を聞いて感じたことを簡単にまとめておきます。

初日の発表からは、各研究機関や研究プロジェクトにおけるパブリックアウトリーチの貧困さが明らかになりました。パブリックアウトリーチという言葉でさえ浸透していない現状では当たり前なのかもしれませんが、どの発表者も、人材・時間・資金そして周囲からの理解の不足を嘆いていました。一方、どの発表者もアウトリーチの大切さを訴えており、日本における現状理解としては、「いたるところにパブリックアウトリーチの大切さを痛感している人がいるけれど、その活動は個人の努力に負うところが大きく、組織的にバックアップできる体制にはなっていない」と考えられます。また「アウトリーチに比較的成功している機関やプロジェクトは、世の中または周囲からの認知度が高く、予算獲得や人材の補填に関してもうまく作用している」ことが、おぼろげながら発表から垣間見えました(例外もあると思われます)。いずれにせよ、昨今の日本の情報公開の流れや米国でのNASA広報の成功等を傍証とすると、パブリックアウトリーチの成功不成功が、研究機関やプロジェクトの盛衰に今後さらに大きな影響を与えることは間違いないでしょう。各研究プロジェクト毎にパブリックアウトリーチ担当者が必要な時代であるとも言えます。

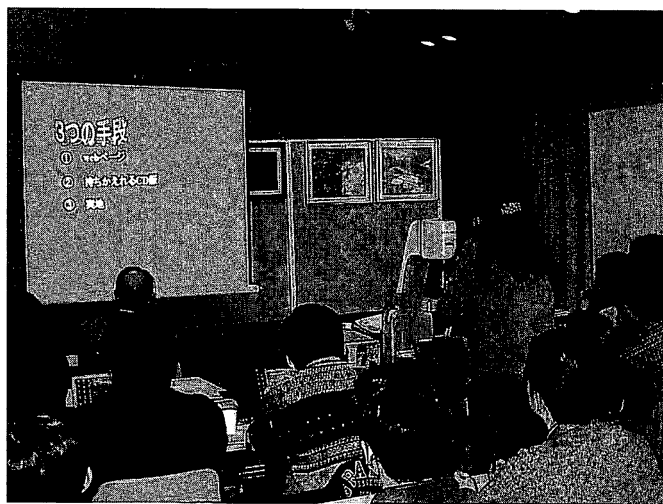
全体の特徴としては、パブリックアウトリーチの努力としてWebコンテンツの充実特に力を注いでいる発表が多く見受けられました。しかし、情報公開や社会への還元を目的を考えた場合、Webのみの努力では明らかに片手落ちです。なぜなら、情報格差に関係

なく、国民全体に向けて発信されるべきであるからです。この点からも、日本のパブリックアウトリーチは、まだまだ発展途上であることがうかがえます。

初日の発表で特に目を引いたのは、大阪教育大学の発表です。「あなた方はいったい何者なのですか?」という質問が飛び出したことから分かるように、なぜ、学部生や大学院生がそこまで、市民向けまたは学校向けのサービスを行うのか、そのモチベーションに関心が集中しました。どこでもパブリックアウトリーチを手伝ってくれる人を求めています。NASDAのようにそのほとんどすべてをアウトソーシングでまかなえるような裕福な機関は珍しく、どこも少ない予算でいかに効率を上げるかを考えている。若い学生たちが、ボランティアに(多少は単位取得とも関係あるようだが)、天文教育普及活動にとどまらず、大学の研究室の広報的な作業まで請け負っている姿は刺激的で、翌日のまとめの議論において、「どこどこのプロジェクトにおいてこのような支援者を求めています」という人材探しのWebページを設定し、学生や院生に呼びかけるという提案に発展しました。情報科の学生にとっては、Web上でのオリジナリティあるコンテンツ制作は卒業研究として成立する場合もあるそうです。金がないので学生を働かせるという日本の科学研究の悪い体質をそのまま引きずっているようで少し気掛かりではありますが、新しい出会いサイトとして、健全に運営されることを希望したいと思います。

翌日の発表では、様々なベクトルでテーマに関連した話題が議論されました。栗野氏の研究現場に教材開発専用スタッフが必要であ

るという提案、有本氏のパブリックアウトリーチの発展のためには、新しい職種（コーディネーター）が必要という提案、松尾氏の資料の目録作りの提案など、興味深い発表が相次ぎましたが、議論の時間が十分取れず残念でした。ただ、今回のようにテーマを絞って30名程度の合宿形式で行う研究会は、発言もし易く、お互いの理解を深めるにはとても有効な機会であったと思われます。このような教育的なテーマの会合は研究者の参加者が少ないものですが、天文情報処理研究会という場もあり、研究者も多く参加し、教育普及関係者とのよき交流の場になったと思います。例によって懇親会も夜遅くまで活発な議論の場として有効に機能していました。また、かわべ天文公園の望遠鏡での天体観望も楽しいものでした。この場を借りて職員の皆様にお礼を申し上げます。



かわべ天文公園の研究会風景